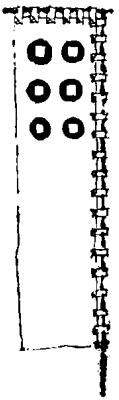
真田幸村

尾崎士郎

双葉新書　時代小説全集 2

真田幸村

尾崎士郎



双葉新書　時代小説全集2

真田幸村

双葉新書　260円（検印廃止）

昭和39年4月1日　初版発行

著者　尾崎士郎

発行者　矢沢領一

発行所　株式会社　双葉社
東京都新宿区市ガ谷田町3の17
電話東京(268)代表5111
振替東京117299

印刷者　山元正宜
東京都新宿区水道町29
三晃印刷株式会社

Printed in Japan

落丁乱丁本がありました場合にはお取りかえします（山晃製本）

真田幸村

©尾崎士郎・1964

目次

第一部

動く影あり……五
何処へ……一一
沼田城……一三
危機……一五
夕闇……一八
月夜……一三
朝霧……二六
戦場の恋……一三
秋日和……一九三
万事休す……二〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

月天心……一〇八
第二部
上田開城……二五
雲は西に……二三
浮世の塵……二八
美少年……二四
春の旅……二五
女忍者……二六
脱出……二九
第三部
運命……一八一
黒い影……一九四

宿世の花……二〇二
おぼろ月夜……二〇八
あぶれ浪人……二一一
真田丸……二二九
後藤又兵衛……二三五

装幀……鴨下晁湖
挿絵……岡本爽太

第一部

動く影あり

篝火（かがりび）の炎が空に映っている。

丘も森も川も民家も昼のようにあかるかった。小山の町を中心とする下野一帯の平原は蒸しむしする暑さの中をごったがえすような騒ぎである。

内大臣、徳川家康自ら総指揮にあたる会津征討の大軍は、すでに宇都宮から佐久山、大田原にかけて前隊の配備を完了した。続く大部隊は岩槻、古河を経由して続々と小山に集結しようとしている。

慶長五年、七月二十五日であった。——夕方から暑さがどっと加わってきた。

街道という街道には小荷駄の馬車がつづき、暑さにうだりながら苦しそうにいななく馬の声が引っ切りなしに聞えてくる。

戸障子をはずした民家の二階では、諸国から到着した部将を迎えるための酒宴がひらかれているかと思うと、町の要所、要所には物具に身をかためた武装の兵が汗びっしょりになって交通の整理にあたっている。

兵糧、弾薬を山のように積んだ板がこいの前には槍を持った不寝番が立っていた。戦国の慌しさは一刻ごとに増大してゆく。

本陣に近い町中はもちろんのこと、大きな家という家は、寺といわず農家といわず、ほとんど一軒残らず大名の定紋を打った幕が張りめぐらされている。

雑兵の兵団は丘をうずめ、谷をうずめ、あたらしい部隊が到着するごとに、トコロ天のように前へ前へとはみだしてゆく。

佐野天明の町を二、三町はなれた長福寺の山門の前には大きな篝火が音を立てて燃えている。山門の両側をかこむ松林の周囲には、六連銭の紋を染めぬいた浅黄の幕。夜眼にもあざやかに炎の色に映っているのは、まぎれもなく信州上田の城主、真田安房守（昌幸）の本陣である。

山門の石段の前には小荷駄の孤包みが整然とつみあげ

られた。その横の広場では、村から狩りだされた百姓女たちが片肌ぬぎになって炊きだしをやっている。
大釜からは沸々と湯気が立ち、汗臭い人いきれの中から、あたらしい馬糞のにおいが鼻先に迫ってくる。
そこから街道につづく民家の土間から、ぼっと灯かげがさし、どっとはじけるような哄笑が起った。
「暑い、暑い、――もう、がまんがならぬ、誰か、おれと相撲をとるやつはおらぬか？」
太い濁み声が聞え、褌一つの素っ裸になった男が表へとびだしてきた。
「おい、しずかにしろよ、清海、お前の声を聞いただけで暑さが腸へ沁みるようじゃ」
縁ばたに、鎧を枕に、これも素っぱだかのまま寝ころんでいた男がむくむくと起きあがった。
左肩にとまった蚊を平手でぴしゃりとたたきながら大きな欠伸をしたのは野呂兵部である。
その民家のひと棟は、左衛門佐幸村の配下に属する勇士たちの詰所になっている。
三好清海は、ちらっと野呂の顔へ流し眼をおくっただけで、軒下の莫蓙の上に、それぞれ思い思いに胡坐をかいたり、寝そべったりしている雑兵たちの集団の前へ歩いていった。
「おい、誰でもいい、おれの鉄棒を振り回してみるやつはおらぬか、――十べん振り回したやつはおれの首持ちにしてやる、そうなれば兜首の十や十五はくれてやるからな」
「何をぬかす、この暑いのに近所迷惑な」
野呂が忌まいましそうな声で叫んだ。
「つまらんことをいう前に、貴様のオンボロ鎧でも脱ぎかえる工風をするがいいや」
「阿呆めが」
相手になるものがいないので清海は、力いっぱい地ひびきを立てながら四股を踏んでみせた。
そこへ、胴巻だけの中小姓が急ぎ足に山門の石段をおりてきた。四股を踏んでいる清海入道の前を避けるようにして土間の入口に突っ立ち、
「猿飛どの」と叫ぶと、すぐ、
「おう」

唸るような声が家の中から聞えた。部屋の片隅に、双肌ぬいだままで胡坐をかき、器用な手つきで網をすいている男がひょっと顔をあげる。
「此処におるぞ……」
「殿のお召しでございます」
「殿とは大殿か？」
「いえ、――若殿」といいかけて、「幸村さまです」
若々しくひきしまった声である。
「よし、心得た」
腰をあげるが早いか傍らに脱ぎすててあった古布子の上にさっと胴をひっかけた。左手に太刀をつかみ、大股にのそりと出ていった。
石段をのぼると、すぐつきあたりが本堂で、幸村の部屋は庫裡の裏手にある六畳の客室である。
中小姓について、暗い廊下を曲ろうとするとき、
「よう」といって、とびだしてきたのは霧隠才蔵である。
この男、今まで姿を見せなかったと思ったら、どこへ行ってきたのか、トンガリ型に日の丸をつけた雑兵陣笠をかぶっている。
「貴様、どこへ？」
「まア、あとで」
雑兵笠に身をかくしているところから察すると、忍びの役目を果しにいったものらしい。
廊下と客室のあいだは幔幕で仕切られ、裏庭の池を前にする客室の中には、幸村が一人だけ端然として平服のまま脇息にもたれている。
「殿、佐助でございます」
ひょいと頭を下げると、
「入れ」
鈍い灯かげの中に、眉が太く額の広い幸村の顔がかすかに動いて、窪んだ眼がギラリと光った。
「遠慮はいらぬ、近う寄れ」
何となく、いつもと様子がちがっている。その神経の動きが佐助の頭に感電するようにひびく。
「今からすぐ沼田まで出向いてもらいたいのだ」
「沼田と申しますと？」
「兄、伊豆守（信幸）の居城だ、――沼田に伴、大助の

いることはその方も知っているであろう」
眉がぴりっと動いた。
「その大助を、姉上には内密に、こっそり上田へ、つれていってもらいたいのだ」
「ハッ」と、いったとたんに佐助の全身がひきしまった。幸村の嫡男で、当年四才になる大助が露乃という十六になる娘につき添われて沼田の城に預けられていることは佐助も知っている。それを姉上に内密というのは、兄伊豆守の妻お澄の方の眼をかすめて盗みだして来いというのであろう。これは容易ならぬことである。
「それは？」
不審そうに膝を寄せる佐助の顔を、じっとみつめ乍ら、
「いよいよ大坂華兵と決った、――武門の道は一つではない。父には父、兄には兄の、おれにはおれのゆくべき道がある」
幸村の眼が、らんらんと輝きだした。
「敵となり味方となるのも時の勢じゃ、幸村の気持はやがて佐助にもわかるときがくるであろう。他言は無用だぞ、明日になったらおそい。急いで行け」
「心得ました」
そのまま一礼して引きさがろうとすると、
「万一の用意もある、その方のほかに誰かつれてゆくものはないか？」
「は」
佐助はちょっと上眼づかいになって考えてから、
「それでは」
秘密をうちあけないですむ上に野放図な気持で同行のできる男といえば、そうだ、大きくて、馬鹿力があって、間抜けで、強情で、命知らずで――と、咽喉元までうかんできた言葉を慌てて嚙みころした。
「三好清海はいかがかと存じまするが」
「よかろう」
「では、殿から直々に」
「うん」
幸村が、かすかな微笑で答えたとき、池の水面がゆらゆらとうごいて、緋鯉が一ぴき跳ねあがった。
佐助が詰所へもどってくると、身体の汗を、うしろから竹ベラを持った雑兵にはじかせていた三好清海が入れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ちがいに呼びだされた。
「そうか、いや、そう来ると思っていたぞ」
出陣命令が下った気持でいるらしい。大慌てに慌てながら土間へ入ってくると、
「こりゃ、おれの小袴はどこへやった？」
ひとりで怒鳴りちらしている。やっと、その小袴を筧金六郎が、ぐるぐる巻きにして枕の代りにしていたことがわかると、
「この野郎、太いやつだ」
矢庭に、ぐっすり眠っている筧の頭を蹴とばして袴をとりあげた。不意をやられた筧は何が何だかわけがわからず、頭を抱えたまま四方を睨み回している。
「三好殿、殿はお急ぎですぞ」
と、中小姓がせきたてる。
「だまれ、それでなくてさえ、こっちは気がせいてならぬのだ、愚図愚図ぬかすなら貴様も手伝え、こら、今度はその鉄棒をとれ」
「こんなものまでお持ちにならなくともよろしいでしょう」
「うるさい、余計なことをいうな、早く持って来い」
「こいつは重くて持てませんよ」
「意気地のないやつだな、三十貫と吹聴しているが、実はたった二十貫しかないのだ、これが持てないなんて、——よし、そんなら、うしろへ回ってこの紐を結べ」
やっと支度ができあがると、黒革胴をつけた清海入道の身体は四斗樽をつみあげたように見える。
「どうじゃ、当家の先鋒はいよいよ、この三好清海入道ときまったぞ、ああ、やっと、これで気持が落ちついた、一番槍、一番首、功名手柄は思いのままだ、おい、みんな、あとで文句をつけたって、もうおそいぞ」
「兄貴！」と、弟の伊三入道が顔をしかめながら叫んだ。
「勝手なことばかり、しゃべっていないで、とっとといったらよかろう」
「そうか」
と、上機嫌で呟きながら山門を入っていったと思うと、十分と経たないうちに戻ってきた。
妙に浮かぬ顔をしているので、浅香郷右衛門が、

「どうした？」
と、声をかけると、
「うん、何だかわけがわからん、鎧をぬいで、衣を着てゆけという仰せだから、こいつは戦さでもないらしい、まア何でもいいや」
清海は忌まいましそうに呟きながら、黒革胴をはずして素っぱだかになった。そのとき、犬伏につづく街道を斜めに、騎馬の武者が十五、六騎流れるように駈けよってきた。
佐野の町はずれまでくると、馬がぴたりととまって、一人の鎧武者が山門にちかづいてきた。
「沼田の殿、参上にござります」
「お通り下され」
篝火をかこむ衛兵の列がざわざわとうごく。
馬を下りて悠々と山門の石段をのぼってきたのは幸村の兄、伊豆守信幸である。そのまま勝手を知っている本堂の前の廊下を土足のまま歩いてくると、うす闇の中から幸村の顔があらわれた。
「兄上」
「おお、佐衛門佐」
幸村は三十一歳、信幸は三十五歳、姿背恰好の似ている上に、声の調子まで同じひびきをもっている。
ただ、幸村とくらべると何となく弱々しそうにみえるのは、少年時代を病弱にすごしてきたせいでもあろう。
本堂の横にある昌幸の座所は八畳二ヶ間の畳を裏がえしにして、その上に蓆が敷いてある。
正面の床柱をうしろにして、床几に腰をかけている昌幸は、二人の入ってきた姿をみると、軽く手招ぎをしながら、
「よくきた、信幸、そこへ坐れ、――いよいよ天下分け目の戦さになりおったのう」
「大坂挙兵のこと、父上にはいかに考えられますか？」
「いや、考えるにも及ぶまい、来るべきものがきただけのことだ」
「すると父上は？」
「是非に及ばぬ、内府（家康）に会って別れの言葉を述べるつもりだ」
「では、いよいよ」

信幸の顔には、みるみるうちに苦悶の色がうかんできた。

「もっと傍へ寄れ、信幸、お前は内府への信義をまもりとおすがよい、おれと幸村は秀頼公の麾下に参じよう、何もくよくよするにはあたらぬ」

「しかし、父上」

わなわなと唇をふるわす信幸の顔を底光りのある眼でぐっと睨み据えた。

「何もいうな、おれは今日の日の来るのを待っていたのだ、おれの望みはお前たち兄弟に天下の権を握らせてみたいだけのことだ、この形勢がどう動くか、そんなことはおれにもわからぬ、東に三十三ヵ国、西に三十三ヵ国、六十余州に風雲がまき起ろうときに、おれは唯、真田一族の運を賭けてひと勝負やってみたい、――もっと傍へ寄れ、信幸、幸村」

父と子が生死の厳頭に立って、まかりちがえば、永遠の別れをしなければならぬという危難を前にして、わが意を得たという昌幸の不敵な面構えの前に信幸は、眼を瞑じ、歯を喰いしばった。

何　処　へ

見わたすかぎり萱野原である。

佐野の宿を出てから、奥州街道とわかれて、表日光連山の裾へはいり込むと道は次第に嶮しくなってきた。

深山の腹をめぐって伸びる一本道が、ようやく高原の展望をかっとひろげたところなのである。

虫が鳴くにはまだ早すぎるのか、秋の気配が漂っていても、あたりはしんとして梅雨あけの空には、ちぎれ雲が流れ、高原の雑草の上に波を描いてわたる風がさやさやと鳴っている。

照りつける暑さをとおして、冷々とした、大気の爽やかさ。

「おい、ひと休みせい」

闇につつまれた広い天地のあいだを、二つの影がよろよろとうごいてゆく。

木かげにうかんだ二人の男の姿である。同じように網

代笠をかたむけてはいるが、一人は、よれよれの黒い法衣をまとい、衣の袖は背中に結びあげている。
その袖口から、筋骨逞しい腕がぐっと伸びて、太い鉄棒を、大地の上にひきずるように、がらんがらんと鳴らしながら歩く。
「こりゃ、咽喉が乾いた、——水を一口飲ませい」
「だから、さっきからいっているんじゃないか、こいつを飲んでしまったら、足尾の沢を越すまで、もう一滴もないぞ」
「いや、わかっとる、すまん、すまん、ああ咽喉が焼きつくようだ」
「仕様がねえなア」
小柄な若い男が竹筒をふってみせた。小さい刀を一本腰に差し、ほそ長い風呂敷包みを肩に背負っている。
一見して旅商人と見ゆる風体である。
「ほれ、いいか、一口でがまんしておけ、すぐまた途中で苦しくなるぞ」
「辱けない、——ちょっとその竹筒を貸せ、いや、おれも貴様をこんなに親切な男だとは思わなかった、ああ持つべきものは友だなア」
「おい、柄にもない余計なお世辞をいうなよ、身体がぞくぞくしてくるぞ」
「ああ、三好清海、生れてはじめて友情のありがたさがわかったよ、この恩は忘れぬぞ、必ず水一升を酒一升にして返すからな」
網袋に入ったままの竹筒をうけとるが早いか、ごくっごくっと咽喉を鳴らしながら飲みほした。
水を飲み終ると、逆に疲れが一べんに出たものらしく、三好清海入道は鉄棒を抱えたまま草の上に腰をおろした。
「やれやれ甘露とはよくいったものだ、おい猿飛、ちょっとひと休みしろ、——おれはもう動くのがいやになった」
「こら、バカをいうな、貴様、動くのがいやなら、おれはひとりで先へゆくぞ」
「待て、——こんなところへ置いてけぼりにされてたまるもんか、それにしても、猿飛、一体、おれたちはどこへゆくんだ？」

「今にわかる、だまっておれについて来い」
佐助は、月光に照らしだされた行手の高原に眼をやった。
あの遠くかすんだ森の向うが足尾のあたりであろう、鞍部を越せば急角度に落ち込む渡良瀬川の渓谷である。その向こうに裏日光の連山が雲とすれすれにそびえている。赤城、庚申、武尊――と、その一つ一つが佐助にとってはなつかしい山々である。
その山麓の峡谷をぬけると、利根の川上に臨む沼田はもう眼の前に見える筈だ。
「もう、ひと息だ、がまんしろよ」
佐助は、飛ぶような足どりで歩きだした。同じ山ふところでも、そこまで出ると、北に向っては北国街道が伸びているし、西へ下れば高崎から碓氷峠を越えて信州にはいる。
小山を立って、十余里の嶮路を馬にも乗らず、ひた押しに歩いてきたのだから、三好清海はおろか熊狩の猟師だってへこたれることは必定である。
そのとき、
「おっ！」と、いいながら佐助はだしぬけに草むらの上へ腹這いになった。大地にぴったりと耳をつけているのである。
「どうした、猿飛？」
「しずかにしろ、馬が来るぞ」
「何、馬が――？」
「おれはひと走りして、様子を見てくるから、入道、ここで待っていろよ」
佐助はひらりと身をひるがえすが早いか、もと来た道を一散に駈けだした。
「おい、ゆっくり行って来いよ、おれはそれまで、ここでひとやすみしているからな」
両手を頭のうしろで組み交したまま、仰向きにごろりと横になった。
しかし、そこで眠るどころか、ほっとひと息するひまもなく、佐助は引返してきた。
「おい、入道、――あとから騎馬武者が一騎やってくるからな、おれはそのへんにかくれていて馬をぶっ倒してやるよ、すると乗り手は先ず落馬するだろう、怪我か、

気絶か、何しろ、弾みがついていやがるから悪くするとそのまま、ころりとまいってしまうかも知れん」
「ほう、そいつはおもしろい」
「だから、入道、貴公はすぐ飛んでいって、介抱するのだ」
「バカをぬかすな、馬を倒す方はおれがやるから貴様、跡始末をせい」
「しいっ、――そら来たぞ、動かないで、じっとしていろ」
パッと草むらに身をひそめたと思うと佐助の姿はもう見えなかった。
そのまま寝そべっている清海入道の耳に大地を蹴る馬の蹄の音が迫ってきた。
なるほど来たわい、猿飛のやつおそろしく耳の早いやつだな――と、呟くうちに、唯一騎、ひた駈けに駈けてくる武士の乗馬姿が視野の中にうかびあがった。
腹巻だけの軽装で、しきりに鞭を振りながら馬をあおっているらしい。
清海は慌てて笠で顔をかくした。馬は早くも彼のうしろに迫ってくる。
「うあっ！」と、思わず叫んだ清海が、一、二問もとびすさったのと、馬が棹に立ったのと、乗った武士が馬の首をとび越えて、ずしんと大地へ叩きつけられたのと、ほとんど同時だった。
立った馬は宙にあがいて、いなないながら荒れ狂い、四方を蹴ってバタバタやっている。後脚の片方に、ほそい綱がからみついているので、動くことが出来ないのである。
落馬した武士は、気を失ったらしく身動き一つしなかった。
なるほど、うまくやりゃがったな、仕方がねえ、どりゃ、介抱――と、清海がのっそりと倒れた武士に近づこうとしたとき、向側の草むらから佐助の姿がぬっとあらわれた。
「これは気絶だ、落ちるときに脇を打ったんだよ、腹巻をつけているから怪我はないさ」
警察医が行路病者をひっくり返してみるように佐助は気絶している武士の身体を無造作にひっくりかえした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong